
ぼっちの俺がスターになるまで

岡崎一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼっちの俺がスターになるまで

【コード】

N0949BA

【作者名】

岡崎一

【あらすじ】

主人公と愉快なぼっち達が音楽で学校のスターを目指す話

エピソード（前書き）

趣味全開で書くバンドもの。

「BECK」読んだ後なのは関係ないはずである

エピソード

俺には学校に友達がいない。

まったくとくない。

いじめられているわけではない。

ただ、誰も俺のことを気にしていないのだ。

そう、誰一人でさえ。

朝はギリギリで教室に入る。遅刻はしない。

休み時間は一人でトイレに行ったり、本や雑誌を読んだりしている。

雑誌は校則で禁止されてるが気にしない

昼休みは一人で飯を食い、また雑誌か本を読む。

放課後は真っすぐ家に帰る。友達がいないので。

ただ、たまに寄り道をする。一人で、近所の本屋に。

それが現役高校生の俺「篠崎 直樹」の高校生活である。

エピソード（後書き）

前のが書き終わってないのに新しいのを投稿してしまった・・・友人に「一個終わってから、新しいのを書け」と上から目線で言うておいてこのザマである

第1話 ネットアイドルその1

昨日気付いたことある。

それは、隣のクラスの小山さん（地味系女子 ぼっち）がネットアイドル「ゆゆ」だということにだ。

俺は自分でもかなり空気な方だと自覚ぼっちしているので、昼休みはちょこちょこ俺の机を使いたいであろうとなり席の女子達に気を遣って、校内散歩をしたりしている。

すると、やっぱり自分と同じぼっちに目が行く。

大体クラスに一人はいるようだ。まあ、自分のクラスには俺を含め二人いるが

そして、となりのクラスA組のぼっちは小山さんだ。

なぜ、俺が名前を憶えているかはおなじぼっちだからである。つまり、勝手な仲間意識である。

そして、俺の趣味はネットサーフィンだ。

一昨日の晩何となく二二 動画を見ていたのだが、再生数のランキングのトップを飾っているある動画を見ていた。

その動画はコスプレをした結構可愛い容姿の女の子がかなりうまい歌声を披露していたのである。

その子が中々に気に入った俺はその子のHPとブログを読んでいた。するとどうだろう、その子は同い年で、しかも住んでる地域が同じと来た。

そこまで来るかなり親近も湧き、その子のファンになりかかっていた。しかしだ、ブログの過去の記事を読んで行くとその子の学校行事とこの学校の行事が全く同じなのである。

まあ、その程度同じ地域に住んでいたら「良くある話」で済むのだ

が、なんとなく見続けるとその子が読んだ本が紹介していた。すると、ある日の記事で俺も少し前に図書室で借りて読んだ本を紹介していた。写真に俺の入れたままで図書室に返却してしまったお気に入りの栞が映っていたのである。その時点で同じ学校のヤツで間違いないのだ。そうになると、やっぱり誰か気になる。それで、ジーツとゆゆの写真を見てみると「どうも見たことがある顔だぞ？」となり、それで気がついた、

となりのクラスの小山 悠佳だと。

気が付いた時はかなり驚いた。

あの地味系ぼっちガールにこんな秘密があるとは・・・ネット上の彼女は動画の生配信の見る限りかなり社会的で明るい元気な女の子だった。

それこそ、女子達のグループのリーダーにいそうな。どう見ても、別人だ・・・

でも、その秘密を知った所でどうするもなかった。ただ、「驚いた」それだけである。

まあ、学校で言いふらすにも友達がいなのが。

そんな、俺だけが知る秘密にその日が少し機嫌良かった。

今日の掃除はサボっていてもほとんどバレることのない実質「掃除無し」の図書室前の階段だった。

しかし、機嫌のいい俺は一人で掃除をしていた。機嫌良く、一人で箒をはいてた。

気が付いたら上から、分厚い本が俺の頭に目掛けて飛んで来た。焦ってしゃがんで本を避けると、目の前にうつ伏せに倒れている女

の子がいた。

可愛いレースのパンツが見えるのには気付かない振りをしておう。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

本を差し出しながら声をかける。

「うう・・・」

痛そうに呻きながら、立ち上がった女の子は俺の上機嫌の理由、小山さんだった。

「あ、ゆゆ」

なぜか”小山さん”では”ゆゆ”と呼んでしまった俺。

目の前の小山さんの顔が一瞬驚いたお顔になり、だんだんと血の気が引いて行く。

焦った俺は急いで本を押し付けて。その場を去ろうとした。

ガシッ

と俺は足首を掴まれた。

「え？」

「君、今なんて言った？」

「な、何も言っていないですよ」

かなり焦る俺。

「ちよつと、いいかな？」

大人しい地味ガールと思っていた彼女は以外と前衛的だった。

第2話 ネットアイドル その2

そして、その”ゆゆ”こと小山さんに連行されて俺は放課後の誰もいない空き教室にいた。

「ねえ君は確か隣の組の篠崎君だよな？」

「ええ、まあ、はい。そうですが」

大人しい子だと思っていた彼女からの意外な威圧感に怯えながら話す俺。なさけねえ・・・

「なんで、わたしが”ゆゆ”だつて知ってんの？」

「あ、やっぱりゆゆだったんだ」

思わずそう言った俺。

しまった、と焦った顔になった彼女

「も、もしかして、鎌かけたの？」

かなり怒ってるようだ。

いや、俺悪くねえし。てめえが、自爆しただけだろ。

とは言えるわけもなくて。

「い、いやぁ違うよ・・・」

と、キョドリ気味に返すしかなかった。

「まあ、いいわ。」

そんなことより、どうやってわたしを”ゆゆ”と見抜いたわけ？」

見抜いた経緯をやっぱり怯えながら話す俺。勿論、ファンになりかけたのは隠してだ。

「ふうくん、あの本がね・・・」

なんだか、考え込んでる様子だ。

「ね、ねえ、あの栞持ってないかな？あれ気に入ってさ」

と、聞いていても無視された。

「ねえ、君はこのこと誰かに話さないの？」

「いや、そんなつもりはないよ。」

「そう。」

「そう。」

と、信用して無さげに俺をみる。

「ほ、ほんとだって！そ、それに俺には友達とかいないしさ・・・」

「ああ、それもそうね」

と、納得したご様子の小山さん。

納得しないでください・・・。はあ・・・

「でも、それだけじゃあ不安ね・・・」

「え、はい？」

なんか不穏なことを言い出したぞ？

「あ、そうだ！

ねえ、篠崎君あたしの生で何かやってよ！！」

「え、あ、は、はい？」

なんか言い出したぞ、この人

「そうよ、共犯になってもらえばいいんだ。

うん、わたし頭いいわあ」

どうしよう、地味系ぼっちガールはとんでもなく前衛的で頭の悪そうな子だぞ？

「で、でもさ、アイドルの君の放送になんの取り柄もない俺が出たら何か言われない？」

よし、もっともらしい言い訳が出来たぞ

てか、なんの取り柄もないって・・・、自分で言っても結構クルものがあるぞ・・・

「え？あなた楽器できたんじゃないの？」

「へ？」

なんで知ってるの？

「だって、去年の初めの自己紹介の時に言ってなかったの？」

「あ、ああ・・・」

俺はベースが弾ける。唯一の特技で、趣味だ。

去年の1年初めの頃に意気揚々と自己紹介で言って、内向的なこの学校では「え？なににあいつ、調子乗ってない？」となり、「しかもベースって（笑）」となって俺のぼっち化を推進したのである。

でも、なぜそんなことをこの女は知っているのか？

「え？聞いたのよ、去年。あたしはずっとぼっちだったわけじゃないし」

俺の表情を読んだのかそう言った。

そうだよな・・・こんな子がずっとぼっちな分けないか・・・

女子の間で喧嘩でもしたのか？

まあ、聞くのは無粋か・・・

「そ、そうなんだ」

と、しか答えられなかった。

「で、なんの楽器できるのよ？」

「べ、ベース」

恐る恐る答える俺

「ベースかぁ・・・地味ね、見た目と同じだわ」

断言した。

結構シヨックだぜ・・・

てか、見た目の地味さはお前にだけは言われたくない！！

「ああ、もう落ち込まないでよ、鬱陶しいから」

ひどい・・・

「まあ、いいわ。そんじゃ、あの栞も渡すし、生に出てもらおうし明

日家に来てよ」

「は？」

今この女なんて言った？イエニコイ？馬鹿か？

「てわけで、明日連れてくから。」

あ、連絡先交換しとくね」

と、言って何故かポケットにあっただはすの俺の携帯と自分の携帯を

操作して勝手に連絡先を交換した。

「また連絡するわね」

そして、出て行った。

勝手だなぁ・・・

なんでだろう、女の子と連絡先交換したのに全然嬉しくない・・・

こうして、俺は何故かネットアイドル”ゆゆ”のネット生放送にでる羽目になった。

第3話 俺のでぶー その1

昨日、連絡先を交換した小山さんからメールがしつこい。ウザい。かなり

昨日自宅に帰って携帯を開いてみたら”新着メール 19件”の表示。

訝しみながら、受信ボックスを開いてみると全て小山さんからのメール……

ではなかったけど、それでも10件は来ていた。あと9件はメルマガだ、無駄に多い。

連絡先交換してから半日も経ってないのにである。

しかも、内容がものすごくどうでもいいものだったりする。

なぜ彼女がぼっちになったかがわかった気がした。

しかし、彼女の本気はここからだった。

帰宅して小山さんからのメールを打ってそのまま風呂に入ってからメールを見た、また10件来ている。

なぜ、一つの返事なのに新しいのを送ってくるのだろうか？

しかし、ここで無下に出来ないのが俺である。

一つ一つにキチンと返事の内容を書いて送ったのだ。それがいけなかった。

今自分が何をしているのか、コレからどうするかが一々事細かに書いて送られて来た。

今から夕食を食べるとか、コレから宿題するなど

一時間に必ず100通以上はメールをしてくる、俺のことはまったく聞きもしてくれなかった。心情的には初めて会う親戚のおばちゃんにずっと話しかけられてる気分だった。

そんなメールは1時頃まで続いた。終わりは唐突に”今から生配信してから寝るから”だけでおわった。

翌日(今日)、基本的に早めに寝る俺は昨日の慣れないメールと遅くまで起きていたせいですと授業中も休み時間も寝ていてた。

まあ、俺がずっと寝ていた所で誰かに不思議がられたり、心配をかけたたりすることはない。それが友達のないいい所だ。

放課後、俺は「昨日家に来い」としか昨日言われてないのでどうすればいいか悩んでいると携帯が鳴った表示された名前は”小山 悠佳”

内容は午後4時にベースを持って学校近くの公園に来いというものだった。因みに今は午後3時26分だ、家までは15分掛かる。まあ、4時にはちときつい。だから、少し時間を遅くして欲しいとメールする。

帰って来た内容は”なんであんたを待たなくちゃいけないの?4時しか認めない”という内容を実に10行近くの文章で書いて来た。仕方ないから諦めてダッシュで自宅に向かう、とりあえず一番手前にあつた服といつも弾いてるベースを担いで学校の近くの公園に誰かに見られない様に裏道から向かう。

到着時刻午後3時58分ギリギリだ。

「遅い、あたしをあんまり待たせないで」

今日会って第一声がこれだ。なかなか理不尽な女である。

まあ、この俺に反抗する気概なんてあるはずもなく

「ああ、待たせてごめんな」

と、素直に謝ってしまう俺はやっぱりヘタレだと思う。

そこから以外と少ない小言を言われながら、彼女の家に向かった

10分程で到着した小山家はまあ普通の家だった。

でかいわけでもない、ごく普通の一般家庭だった。

「じゃあ、行きましよう」

と、下に続く階段に降りた。

すげえ、地下があるよこの家・・・見た目普通の家なのにすげえしかも、防音だぜ・・・

本物の金持ちは見えない所で金を派手に使っらしいとゆうが、ほんとのようだ。何気に金持ちなのか・・・

地下の部屋に入ってみると、普通のスタジオっぽかった。

「ちよっと、機材の用意するから待ってて」

と、俺を廊下に残して部屋で何やらごそごそする小山さん。

よく考える結構スゴいことになってないか？

だって、この間までただの地味系ボツ仲間だと思っていた（一方的に）小山さんが、今じゃ理不尽で前衛的なネットアイドルだけ？人間の人生とは、わからないものだ。

なんて、しょうもないことを考えてたら小山さんが

「準備できたよ」

と、声をかけて来た。何気に着替えてメイクしてるし・・・

すっかりネットアイドル”ゆゆ”だ。

「じゃあ、始めようか」

こうして、俺は初めて人前でベースを弾いた。

第3話 俺のでぶー その1（後書き）

やっぱり、俺には小説書くのは向いてないと思う。

あと、レッチリのフリーはやっぱりかっこいいと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0949ba/>

ぼっちの俺がスターになるまで

2012年1月9日06時46分発行